『保元物語』写本目録稿

原水民樹

小稿は、現在その存在が確認される『保元物語』写本を一覧に付すものである。

『保元物語』諸本は、戦前、高木武[1]・土橋寛[2]・高橋貞一[3]氏らの努力により発掘・分類され、その系統化の基礎が築かれた。以後、新たな写本が出現する一方で、不明になるものもあり、異同が生じていたが、森井典男[4]氏の先駆的な分類試案を経て、昭和三十六年、永積安明氏により、現存本が新たな体系のもとに分類・整理され、現在の研究の基盤が確立した。その後、犬井善壽氏が数本を加え独自の系統分類を提唱された。これ以降も、各地の図書館・文庫の整備、目録公刊等が進展したことも手伝って、新たな伝本の存在が報告される状況が続いており、現時点における伝本存在の実状を正確に知ることは必ずしも容易ではない。そうした困難を解消する一助として遺漏の多いものではあるが、小稿の作成を思い立った。

一　諸本分類について

まずは、諸本分類についての認識状況を簡単に述べたい。現在、『保元物語』の諸本分類に関しては、永積氏の提示されたそれがもっとも定着・通行しているとみてよいだろう。その分類体系は、文保・半井本系統を最古態第一類とみなし、諸本を全十類に整理したものである。すなわち、

第一類　文保・半井本系統の諸本
第二類　鎌倉本
第三類　京図本系統の諸本
第四類　金刀本系統の諸本
第五類　京師本系統の諸本
第六類　正木本系統の諸本
第七類　龍門本
第八類　杉原本
第九類　流布本系統の諸本
第十類　その他の諸本（書陵部蔵保元記）

とするものである。[5]

この後、これを修正する形で、犬井氏による新たな分類が提示された。それは、

宝徳本系統　保元記系統　杉原本系統　版行本系統
根津本系統　龍門本系統　康豊本系統　文保本系統

との八系統分類である。[6]

犬井氏の分類法の特質や研究史上の位置については、既に栃木孝惟氏[7]による精明な認識、近くは平野さつき氏[8]さらには高村圭子[9]・羽原彩両氏による的確な把握に尽くされており、こと新しく説明するまでもないが、小稿に必要な範囲で再論する。犬井氏の述べられるところに従えば、「本文変化」には「著作性本文形成」（構成・表現・思想の三点に関する、物語全体にわたる本文改変）と「書写性本文変化」（表記の改変・小さな意改・誤写・誤読・誤脱・訂正など、もっぱら所拠本をそのままに写すという書写態度において生じる本文変化）の二種類があり、氏の分類は「現存する諸伝本の範囲内で明らかにしうる『保元物語』の著作性本文形成の度数の確認」を目的としてなされたものという。この点、古態本文の追究、及び古態からの派生・展開の実相捕捉を主目的とする従来の分類法とはいささかその目的・立場を異にするといえる。ただし、犬井分類は永積分類に依拠・立脚している。呼称は相違するものの、各系統の指し示す伝本群は、永積氏のそれとほぼ一致している。具体的に言えば、宝徳本系統は金刀本系統に、版行本系統は流布本系統に、根津本系統は京図本系統に、康豊本系統は鎌倉本に、文保本系統は文保・半井本系統に各々対応している（保元記・杉原本・龍門本はそのまま）。結局、両者の分類法の唯一の相違は、永積分類における第五類京師本系統及び第六類正木本系統を、犬井分類では独立した系統とみなさず、宝徳本（金刀本）系統に配属していることにあるといってよい。この処置については犬井氏自身による明快な説明がある。氏の見解によれば、京師本・正木本両系統は共に、宝徳本（金刀本）系統本文の末尾に根津本（京図本）系統の為朝説話を追加したに過ぎず、そこには「改作者流の著作性本文形成」が認められない。従って「特別に系統として独立させる必要はない」[10]という。氏の論理からすれば、当然の処置ではある。もっとも、これらを宝徳本系統に組み入れることについて、氏自身多少の疑義を漏らしてはおられる。[11]

犬井分類の特徴は、系統立てそのものではなく、各系統に属する伝本群を精密に校合、系統内部を系列に細分する作業を通して、系統中における最善本を認定、それをもって系統の呼称とすることを提起されたことにある。永積氏の系統命名には必ずしも明確な論拠が提示されているとはいえないのに比し、犬井氏のそれは論理的・自覚的な前進といえる。

ここに至り、判断を迫られるのは、目録作成に際し、永積・犬井分類のいずれに拠るべきかということである。[12] 犬井氏の論を通読する限り、それはきわめて説得力に富んでいるように思われる。小稿作成のためにそれら諸論の追検証を行う機

会を得たが、その作業によっても、氏の分類法の妥当性が首肯される場合が多々あった。が、その一方で疑問も生まれた。以下、備忘的ながらいくつかの系統についていささかの私見を述べてみたい。

まず、「康豊本系統」との呼称について述べたい。これは永積分類では「鎌倉本」と称されている。「康豊本」「鎌倉本」の呼称については、それぞれに来歴がある。鎌倉本なる呼称は、元禄六年（一六九三）刊行の『参考保元物語』に発する。一方、康豊本なる呼称は高木武氏により初めて用いられ、高橋貞一氏に引き継がれ〔土橋氏は、鎌倉本（或、康豊本）と、両称を併記〕、犬井氏により、復活させられたものである。周知のことだが、彰考館蔵の該本の上・下巻奥には「保元物語（下）　上野介康豊／（右）以鎌倉相承院本写之畢」、中巻奥には「此一巻以鎌倉等覚院本写之畢」とあり、上・下巻と中巻とはその親本を異にしている（中巻は金刀本系統本文）。犬井氏が、「鎌倉本」との呼称を退けて、「康豊本」との呼称につかれたのは、上・下巻が鎌倉相承院本の写し、中巻が鎌倉等覚院本の写しで、いずれも鎌倉本と呼び得る曖昧さを懸念されたためで、上・下巻識語に見える「上野介康豊」による方が妥当と判断されたものと思われる。指し示す対象（すなわち上・下巻）が明確であるという利点を重んじれば、「康豊本」と称する方がより適正との感を抱く。もっとも、参考本は、その凡例に「此本第二巻闕」と記すように上・下巻のみを指して鎌倉本と称しており、当初から概念は明白なのだから、別称への変更は混乱のもとと考える意見もありそうだ。古典研究会刊『保元物語』（汲古書院）解題はこの立場に立つものだろう。

次に、「版行本系統」なる名称について考える。永積分類では「流布本系統」と呼ばれる一類である。「流布本」なる語が概念の曖昧さの故に、学術用語としてふさわしくないとはよく言われる。おおよその通念としては、近世期に古活字版や整版等の形態で世に広く流布した伝本群を指すと解されており、犬井氏がこれを版行本系統と称されることも故なしとしない。しかし、そう呼ぶには解決しなければならない問題がある。該系統は、数種の古活字版・整版及び若干の写本から構成される一類である。この中、版本は、古活字版第一種を源流とするとの川瀬一馬氏の説が今に認められているが、[13]写本はほとんど等閑視されてきた。これら写本の多くが版本の写しであるという現実からすれば、それもやむを得ないことだったとは思う。しかし、大東急記念文庫蔵褐色表紙本・蓬左文庫蔵片仮名交本・東京国立博物館蔵片仮名交本等の写本に限っては、版本中の最善本とされる古活字版第一種と相補関係にあり、版本の後流に立つものとして一蹴されるべき性格のものではない。[14]この事実は、突き詰めれば、版行を目的として新たに該系統本文が作成されたものか、或いは当時存在した写本の中からある一本（一系統）が版行に付すべくたまたま選ばれたのか、すなわち、原流布本が写本か印本かの問題に帰すものである。この点が明快にされていない現在、

該系統を「版行本系統」と称することにはなお疑念があると考えている。

ついで、「根津本系統」なる名称について考える。永積分類では「京図本系統」と称される一類である。犬井氏は、この系統に属する諸本の本文を対校・精査された結果、「京図本系統のより信頼し得る本文を再現するためには、教本（後、根津本と改める－原水注）を中心におくべきであろう」[15]と結論され、該系統を根津本系統と呼ぶことを提唱された[16]。氏の分析は緻密で、説得性に富むが、また氏自身も述べられるように、根津本は「誤脱という面ではやや難があ」り、該系統諸本中、卓絶した本文を有しているわけではない。いわば、消去法の結果残された伝本との色合いが濃い。「完全に信頼できる本はない」という状況の中で、根津本の信頼性はかなり相対的なものにすぎない。また、私見に依れば、該本には微細ながら固有の書き換えもいくほどか見いだせ、後出の要素が認められる[17]。根津本本文の本来性がかなり相対的であることは、学習院大学蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』の存在によっても明白である[18]。以上のことより、該系統を根津本系統と呼ぶことには幾分の不安がある。根津本が「より信頼し得る伝本」であるとの氏の考証結果を尊重したいとは考えるが、なお未紹介の伝本が発掘されつつある現在、最終決定にはもうしばらくの猶予を見たいと思う。

以上、犬井氏の系統命名のいくつかについて私見を述べた。この他、「宝徳本系統」なる名称については、栃木氏が宝徳本・東大本・金刀本の対校を踏まえた上で、「四類本の代表本文を決定する課題は、なお多くの問題を残している[19]。」と、慎重な発言をされている。さらに、系列名についても疑問がないわけではない。例えば、宝徳本系統中の陽明本系列の場合、確かにそれは系統内で一つのグループをなしていると認められる。しかし又、陽明本は独自異文を多く持つが故に、該系列の中では個性の強い伝本とみなされる。独自性が濃いという点で一系列を立てる意味はあるといえるが、それがそのまま系列共通の個性とはなっていないという理由から、該系列を陽明本で代表させることにはいくぶんの疑義がある。このように、系統・系列分類、系列の代表伝本の認定にあたっても、さらに慎重な検討が要求される。ただし、小稿の目的は、永積・犬井分類の当否を問うことではない。伝本の整理・掲載に際し、依るべき分類法を定める必要に迫られたことにある。将来的には、恐らく犬井分類を修正した形での諸本体系が定着することになると予測されるが、小稿では便宜上、原則として永積分類に従うこととする。その理由は、犬井命名の場合、各系統における最善本の認定という重さを伴うため、その使用には慎重にならざるを得ないのに比し、永積命名は、分類・判別のための便法的。符号的な意味合いがなお濃いと理解したためである。普及度も高いので暫定的な呼称として従いたい。

最後に、伝本分類・系統化作業の意義並びに限界について一言したい。松尾葦江氏は『平家物語』の諸本について「我々

が今純化してイメージしている覚一本、屋代本、延慶本等々が最初から純粋な本文として成立したわけではなく、混態を繰返して行く内にその個性が分岐して行き、いわば鎖のとびとびの環だけが不連続に残存しているのかも知れない。[20]」と述べられる。『保元物語』の実状も『平家物語』とさほど大きく変わらなかっただろうという意味で、この発言は貴重である。分類・系統化作業により得られた結果が、物語の変容・異本派生の実相をさながらに写し出すわけではあるまい。系統・系列という概念をあまり固定的に考えすぎると、かえって諸本展開の実状を見誤ることになりはしないか。極論すれば、系統分類とは、共通本文を最大公約数的に処理したものにすぎない。量的には少ないが、その網目からこぼれ落ち放置される現象がある。例えば、金刀本系統に属する伝本に見られる本文異同のすべてが、系統内部の問題として解決できるわけではない。系統という境界をこえて考えなければならない現象も決して少なくはない。ある系統に属する伝本のすべてが系統原本というべき共通祖本を根元として、その埒内で純粋培養的に分岐・展開していったわけではない。そこに所属する伝本のいくつかは、直接あるいは間接の形で他系統との想像を越えるほどに錯綜した交渉の中から生み出されたと思われる。まして、系列の次元になればそれはなおさらである。一つの系統に属する伝本群の共通祖本としてのいわゆる系統原本を想定することは自明のように思われるが、一方仮想に過ぎないようにも思われる。自省をも含めてこうしたことを考える時、系統（系列）分類の作業も、諸本の展開・派生の実状を模索する際の一つの便法の域を大きくでるものではないと思われさえする。系列分類についてなお言えば、例えば、犬井氏は宝徳本系統内部を当初は三系列に分けられたが、後に四系列に訂正分類されている。その一つである松井本系列に着目する時、所属六本の中では、静嘉堂文庫蔵玄圃斎旧蔵本・天理図書館蔵袋綴本がさらに小さなまとまりをなして、他四本に対峙するという現象がみられる。極端なことを言えば、松井本系列をさらに二系列に割ることもできないわけではない。系統分類ましてや系列分類はその程度に流動的・便宜的であるといえばいえるのである。分類・体系化が、本文の変容を理解する上で至便であることは言うまでもないが、あまり固定的に考えると、かえって、実態を捉え誤る弊害もあるのではないか。以上のことより、私は、系統化・系統（系列）名称に関してさしあたり自分の見解を示すことは差し控えたい。

（1）「保元平治物語の書史学的一考察」（『国語と国文学』大15・十）、後に、『日本精神と日本文学』（冨山房　昭13）に補訂収録。

（2）「保元平治物語の一研究（上）（中）（下）」（『国語国文』　昭8・六、七、九）

（3）「保元・平治物語の諸異本より流布本の成立（上）（中）（下）」（『書誌学』　昭9・一、二、四）、後に、『平家物語諸本の研究』（冨山房　昭18）に収録。

(4)「『保元物語』の形成と発展―『語りもの』の形成に関する一試論―」(「国文論叢」第8号　昭35・五)、後に、日本文学研究資料叢書『戦記文学』(有精堂　昭49)に採録。

(5)日本古典文学大系『保元物語　平治物語』解説。後に、『中世文学の成立』(岩波書店　昭38)で補訂。

(6)『鎌倉本保元物語』(三弥井書店　昭49)解題中、「『保元物語』伝本分類私考―康豊本系統と文保本系統の独立―」

(7)東京大学国語研究室資料叢書『保元記　平治物語』解題(汲古書院　昭61)

(8)「戦後『保元物語』研究史の展開―昭和の終焉まで―」(『保元物語の形成』　汲古書院　平9)

(9)東京大学文学部国文学研究室蔵『保元物語』―翻刻と研究―」(早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻中世散文研究室　平9・十)付載「諸本研究史」

(10)「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」(『和歌と中世文学』　昭52)

(11)なお、永積分類においても、金刀本と京図本の取り合わせ本である蓬左文庫蔵本・神宮文庫蔵本を、京図本系統に属させている。勿論、解説にはその旨明記してあるが、分類としては一つの便法であり、必ずしも実態に即したものではない。別立てしなかったのは、煩雑を避けたためだろう。

(12)平野氏は注(8)の論文中で、「先行研究をふまえ、厳密な態度で為された(犬井)氏の本文研究は高い評価を得たのだが、各系統の名称などに関しては何故かあまり定着をみなかった」と述べられる。

(13)『増補古活字版之研究』　昭42

(14)拙稿「『保元物語』流布本の古態を求めて」(「徳島大学総合科学部言語文化研究」第二巻　平7・二)

(15)「京図本系統『保元物語』本文考―二系列分類とその本文の吟味―(上)(中)(下)」(「言語と文芸」第60、61、63号　昭43・九、十一、44・三)

(16)注(6)(10)の論文。

(17)拙稿「管見『保元物語』の伝本二、三」(「徳島大学総合科学部創立記念論文集」　昭62・三)

(18)拙稿「学習院大学蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』の本文」(「名古屋大学国語国文学」第63号　昭63・十二)

(19)注(7)の解題。

(20)「平家物語の本文流動―八坂系諸本とはどういう現象か―」(「國學院雑誌」第96巻第7号　平7・七)

二　現存写本目録稿

目録の作成は、左記の要領による。

①　系統分類は永積氏のそれを踏襲し、系統内部の細分すなわち系列分類は犬井氏に従う。

②　系統名は永積氏のそれに従い、犬井氏の命名を(　)

内に併記する。

③　伝本の掲出にあたっては、犬井氏作成のものを基盤とし、それを増補する形を取る。各伝本の呼称もできる限り犬井氏（「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」）に従うが、適宜改める場合もある。なお、流布本系統については私意に作成。

④　現在までに言及のない、また既に言及がなされていても補説が必要と思われる伝本については、その頭に数字を冠し、書誌並びに本文の性格についての説明を、稿末にまとめて記す。

⑤　翻刻・影印（マイクロフィルムも含む）にふされている伝本については、各々（翻）、（影）の項目をもって示す。国文学研究資料館及び慶應義塾大学附属研究所斯道文庫にマイクロフィルム（紙焼本）があるものについては、各々「資料館」「斯道」の略号のもとに、その請求記号を転記する。斯道文庫については、同文庫編「マイクロフィルム等目録初輯」（昭62）及び「斯道文庫論集」第22輯（昭63・三）所収目録による。

⑥　個々の伝本についての解題・解説や参考となる資料がある場合、各々（解）（参）の項目をもって示す。

事実上、永積分類と犬井分類を混用する形となるが、便宜的に分かりやすくを旨とした。

第一類　文保・半井本系統

彰考館文庫蔵文保本

（影）「軍記と語り物」第6号　昭43・十二、古典研究会叢書『保元物語』上巻（汲古書院　昭47・六）、資料館　32―37―2　E694、斯道　A338E

（翻）『鎌倉本保元物語』（三弥井書店　昭49・十二）

（解）古典研究会叢書『保元物語』解題（汲古書院　昭49・三）

内閣文庫蔵半井本

（影）資料館　19―44―5　E2367

（翻・解）『保元物語（半井本）と研究』（未刊国文資料刊行会　昭34・五）、新日本古典文学大系『保元物語　平治物語　承久記』（岩波書店　平4・七）

彰考館文庫蔵半井本

（影）古典研究会叢書『保元物語』上巻（汲古書院　昭47・六）、資料館　32―37―4　E696、斯道　G1015・A338F

（解）古典研究会叢書『保元物語』解題（汲古書院　昭49・三）

慶應義塾研究所斯道文庫蔵本（下巻首欠）

（解）「創立十周年記念近蒐善本展観目録」（斯道文庫昭45・十二）、古典研究会叢書『保元物語』解題

（汲古書院　昭49・三）、『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選図録解題』（平9・二）

第二類　鎌倉本（康豊本系統）

彰考館文庫蔵康豊本（除、中巻）

（影・解）古典研究会叢書『保元物語』下巻（汲古書院　昭49・三）、資料館　32－37－3　E695、斯道　A338D

（翻）『鎌倉本保元物語』（三弥井書店　昭49・十二）

第三類　京図本系統（根津本系統）

（根津本系列）

筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本

（影）資料館　6－51－7　E217

学習院図書館蔵斑山文庫旧蔵本

（影）資料館　216－145－3　E7569

（参）高野辰之「保元物語再読」（「歴史と国文学」　昭15・六）

①龍谷大学図書館蔵本

（解）原水「管見『保元物語』の伝本二、三」（「徳島大学総合科学部創立記念論文集」　昭62・三）

②仁和寺蔵本（後半部のみ）

蓬左文庫蔵平仮名交本（上巻の東三条殿行幸記事以降下巻末まで）

（影）資料館　48－65－5　E1462

（翻）「名古屋市蓬左文庫蔵保元物語〈平がな本〉翻刻　上・下」（「説林」第37、38号　平1・二、2・二）、『保元物語』（武蔵野書院　平5・四）

神宮文庫蔵賢木園文庫旧蔵本（上巻の東三条殿行幸記事以降下巻末まで）

（影）資料館　34－406－3　E3587

③原水蔵本（上巻のみ存、上巻の東三条殿行幸記事以降上巻末まで）

（史研本系列）

京都大学国史研究室蔵本

（京図本系列）

京都大学附属図書館蔵本

（翻）『京図本保元物語』（和泉書院　昭57・三）

学習院図書館蔵慶長十六年奥書本

（参）「弘文荘待賈古書目」第30号　昭32・十

早稲田大学図書館蔵枡型本

未勘。左記影印付載の白崎祥一氏の解題に従って位置づけた。

（影・解）早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』（早稲田大学出版部　平2・六）

（影）斯道　A563C（赤木文庫）

（参）久保尾俊郎「早稲田大学図書館所蔵軍記文献目録」（『軍記文学の系譜と展開』　汲古書院　平

10・三）

（三系列のいずれにも属さない伝本）

学習院大学国語国文学研究室蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』断簡

（影）資料館　216－31－2　N1955（忠光卿記）

（解）原水「学習院大学蔵『忠光卿記』紙背『保元物語』の本文」（「名古屋大学国語国文学」第63号　昭63・十二）

（参）「弘文荘待賈古書目」第11・30号　昭13・五、32・十（忠光卿御記）

第四類　金刀本系統（宝徳本系統）

（宝徳本系列）

陽明文庫蔵宝徳三年奥書本

（影・解）陽明叢書『保元物語』（思文閣　昭50・十二）、京都大学[1]文学部蔵影写本

（影）資料館　55－155－2　E2901

東京大学国語研究室蔵『保元記』

（影・解）複刻日本古典文学館『保元記』（ほるぷ出版　昭53・四）、東京大学国語研究室資料叢書『保元記　平治物語』（汲古書院　昭61・二）

学習院図書館蔵九条家旧蔵本

（影・解）日本古典文学影印叢刊『保元物語　平治物語』（日本古典文学会　昭63・五）

④中京大学図書館蔵本

（影）資料館　299－20－2、斯道　A564C（赤木文庫）

（解）『中京大学附属図書館蔵国書善本解題』昭55・十、『中京大学図書館蔵国書善本解題』平7・三

今治市河野美術館蔵斑山文庫旧蔵本

（影）資料館　73－124－3　E3170、斯道　G194・B389B

（参）高野辰之「保元物語再読」（「歴史と国文学」昭15・六）

九州大学附属図書館支子文庫蔵本

未勘。左掲影印叢書付載の笠栄治氏の解題に従って位置づけた。

（影・解）在九州国文資料影印叢書『保元物語』昭54・七

（影）資料館　250－16－3　E6326

彰考館文庫蔵京師本〈京師本系統－永積分類〉（為朝説話のみ京図本系統）

（影）古典研究会叢書『保元物語』上巻（汲古書院　昭47・六）、資料館　32－37－1　E693、斯道　A339E

（解）古典研究会叢書『保元物語』解題（汲古書院　昭

49・三）

静嘉堂文庫蔵旧本〈京師本系統－永積分類〉

（為朝説話のみ京図本系統）

（影）マイクロフィルム版　静嘉堂文庫所蔵『物語文学書集成』第五編（雄松堂　昭59）

尊経閣文庫蔵大型本〈京師本系統－永積分類〉

（為朝説話のみ京図本系統）

今治市河野美術館蔵大型本〈京師本系統－永積分類〉

（為朝説話のみ京図本系統）

（影）資料館　73－124－2　E3169、斯道B1104D

（参）「弘文荘待賈古書目」第14・20号　昭15・五、26・六

尊経閣文庫蔵伝積善院尊雅筆本

（為朝説話のみ京図本系統の由）

（解）犬井「前田家本『保元物語』管見」（東京教育大学中世文学談話会「会報」三号　昭45・三）

（陽明本系列）

陽明文庫蔵三巻本

（影・解）陽明叢書『保元物語』（思文閣　昭50・十二）

（影）資料館　55－155－1　E2900

京都大学国文研究室蔵『保元記』

⑤広島大学国語学国文学研究室蔵米子市立米子図書館旧蔵本

正木信一氏蔵本〈正木本系統－永積分類〉（未見）

（為朝説話のみ京図本系統の由）

（参）正木本『保元物語』上・中・下　私家版　昭45・四（未見。「軍記と語り物」第31号〈平7・三〉付載「軍記物研究文献目録」に拠る）

宮内庁書陵部蔵平仮名交本〈正木本系統－永積分類〉

（為朝説話のみ京図本系統）

（参）「弘文荘待賈古書目」第26号　昭31・三

⑥国文学研究資料館蔵宝玲文庫旧蔵本〈正木本系統〉

（解）「国文学研究資料館特別展示目録13　第19回特別展示　新収資料展－昭和63～平成2年度期－」平3・十一、国文学研究資料館創立二十周年記念「特別展示図録」平4・十一

（参）「一誠堂古書目録」第69号　平1・十二

大東急記念文庫蔵屋代弘賢書入本

（為朝説話のみ京図本系統）

（影）『大東急記念文庫所蔵古写古版物語文学総瞰』雄松堂

（解）川瀬一馬『古写古版物語文学書解説』（大東急記念文庫　昭49・十）、『大東急記念文庫貴重書解題』第三巻　国書之部　昭56・十一

仁和寺蔵本（前半部のみ）

（松井本系列）

静嘉堂文庫蔵松井簡治博士旧蔵本

（影）マイクロフィルム版　静嘉堂文庫所蔵『物語文学書集成』第五編（雄松堂　昭59）

静嘉堂文庫蔵玄圃斎旧蔵本

（影）同右

天理図書館蔵袋綴本

（参）「弘文荘待賈古書目」第8、10号　昭11・十一、12・十

九州大学国文研究室蔵本

⑦実践女子大学図書館常磐松文庫蔵本

蓬左文庫蔵平仮名交本

（影）資料館　48－65－5　E1462（上巻頭より後白河勢出撃記事まで）

（翻）「名古屋市蓬左文庫蔵保元物語〈平がな本〉翻刻　上・下」（「説林」第37、38号　平1・二、2・二）、『保元物語』（武蔵野書院　平5・四）

神宮文庫蔵賢木園文庫旧蔵本

（影）資料館　34－406－3　E3587（上巻頭より後白河勢出撃記事まで）

原水蔵本（上巻のみ存。上巻頭より後白河勢出撃記事まで）

（松井本系列に近い伝本）

⑧早稲田大学図書館蔵津田葛根識語本

（影）斯道　A563C（赤木文庫）

（参）「玉英堂稀覯本書目」第123号（昭53・六）、久保尾俊郎「早稲田大学図書館所蔵軍記文献目録」（『軍記文学の系譜と展開』　汲古書院　平10・三）

（金刀本系列）

金刀比羅宮図書館蔵本

（影）資料館　42－1－2－1　E2844、斯道　G1321・B391C、京都大学文学部蔵影写本

（翻）日本古典文学大系『保元物語　平治物語』（岩波書店　昭36・七）

天理図書館蔵粘葉本

⑨東京国立博物館蔵平仮名交本

（解）原水「管見『保元物語』の伝本二、三」（「徳島大学総合科学部創立記念論文集」　昭62・三）

内閣文庫蔵袋綴本（上巻欠）

学習院大学国文研究室蔵本（上巻欠）

（影）資料館　216－144－2　E7566

彰考館文庫蔵等覚院本（中巻のみ）

（影）古典研究会叢書『保元物語』下巻（汲古書院　昭49・三）、資料館　32－37－3　E695、

斯道Ａ３３８Ｄ

第五類　京師本系統

第四類　金刀本系統の部に掲載済み

第六類　正木本系統

第四類　金刀本系統の部に掲載済み

第七類　龍門本

龍門文庫蔵鍋島家旧蔵本

（解）『龍門文庫善本書目』　昭57・三

第八類　杉原本系統

彰考館文庫蔵杉原本

（影）古典研究会叢書『保元物語』下巻（汲古書院　昭49・三）、資料館　３２－３６－５　Ｅ６９２、斯道　Ａ３３８Ｂ

（解）古典研究会叢書『保元物語』解題（汲古書院　昭49・三）

専修大学図書館蔵蜂須賀家旧蔵本

（解）『専修大学図書館蔵蜂須賀家旧蔵本目録』　昭59・九

ソウル大学蔵本（未見。資料館フィルムによる）

（影）資料館　２６９－３１－３　Ｅ７７２１

（参）原水「杉原本『保元物語』雑考」（「徳島大学総合科学部言語文化研究」第三巻　平８・二）

第九類　流布本系統（版行本系統）

茨城大学附属図書館蔵本

今治市河野美術館蔵下条屋文右衛門旧蔵本

（影）資料館　７３－１２５－１　Ｅ３１７１、斯道　Ｂ１１０５Ｊ・Ｂ１１１３Ａ

今治市河野美術館蔵列帖本

（影）資料館　７３－１２５－２　Ｅ３１７２、斯道　Ｂ１０９５Ｂ・Ｂ１１０６Ａ

大阪天満宮蔵本

（影）斯道　Ａ６７８Ｉ～６７９Ａ

神宮文庫蔵村井敬義奉納本

（影）資料館　３４－４０６－１　Ｅ３５８５

大東急記念文庫蔵褐色表紙本

（影）『大東急記念文庫所蔵古写古版物語文学総瞰』雄松堂

（解）川瀬一馬『古写古版物語文学書解説』（昭49・十）、『大東急記念文庫貴重書解題』第三巻　国書之部　昭56・十一

天理大学図書館蔵松平家旧蔵本

東京国立博物館蔵片仮名交本

内閣文庫蔵井上頼圀旧蔵本

（影）資料館　19－45－2　E2369

名古屋市鶴舞図書館蔵本

蓬左文庫蔵片仮名交本

（影）資料館　48－65－4　E1461

（解）『名古屋市蓬左文庫善本解題図録』第一集　昭55・八、『蓬左文庫図録』　昭58・十

広島大学国語学国文学研究室蔵越国文庫旧蔵本

福井県立図書館保管松平宗紀氏所蔵本

仏教大学図書館蔵本

穂久邇文庫蔵横本

穂久邇文庫蔵竹裏館文庫旧蔵本

〔以上、原水「『保元物語』流布本系統写本についての基礎調査」（「汲古」第26号　平6・十一）をもととした〕

⑩福島県三春町歴史民俗資料館蔵本

⑪正宗文庫蔵本

島津久厚氏蔵真名本

未見。左掲高橋氏論文に従って位置づけた。

（解）高橋宏幸「『保元物語』『平治物語』の真名本について―表記を中心に―」（『中世説話の世界』　笠間書院　昭54・四）

第十類　その他の諸本

宮内庁書陵部蔵『保元記』

東京大学文学部国文学研究室蔵本（上巻のみ存）

未見。左掲論文に従って位置づけた。

（翻・解）「東京大学文学部国文学研究室蔵『保元物語』―翻刻と研究―」（早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻中世散文研究室　平9・十）

不詳本

京都国立博物館蔵天正二十年書写本（非公開）

『京都国立博物館百年史』（平成9）所収「京都博物館旧蔵和古書目録」に拠る。

関係文献

京都大学附属図書館蔵『保元一乱記』

（解）原水「『保元物語』受容の一端―『保元一乱記』『保元平治』の場合―」（『後藤重郎先生古稀記念国語国文学論集』　和泉書院　平3・二）

龍谷大学図書館蔵『保元平治』

（解）同右

塩釜神社蔵絵詞

（影）資料館　シ2－5－1

（参）笠栄治「『絵詞平治』（塩釜神社蔵本）について」（『福田良輔教授退官記念論文集』　昭44・十）、原水「杉原本『保元物語』雑考」（「徳島大学総

合科学部言語文化研究」第三巻　平8・二）

⑫群馬大学附属図書館蔵『保元物語抜抄』

（影）資料館　77－20－6

内閣文庫蔵賜蘆拾葉所収本

（影）資料館19－165－1－53　A22

（解）原水「管見『保元物語』の伝本二、三」（「徳島大学総合科学部創立記念論文集」　昭62・三）

⑬松平文庫蔵『保元物語抜書』

（翻・解）笠栄治「松平文庫蔵『保元物語抜書』」（「軍記と語り物」第2号　昭39・十二）

⑭東海大学附属図書館桃園文庫蔵『保元物語』一本

⑮東海大学附属図書館桃園文庫蔵『保元物語』二本

（1）整理番号　国文学／oil／3。外題は表紙左題簽に「陽明文庫本影写保元物語上（下）」。二巻二冊。袋綴。平仮名交じり。書写者は、上巻中路富美子、下巻川上まき子。朱筆にて補正。巻末に「陽明文庫本により透写せしむ／昭和十五年十一月」。

（2）整理番号　国文学／oil／4。外題は表紙左題簽に「金比羅神社本影写保元物語上（～下）」。三巻三冊。袋綴。平仮名交じり。書写者は、上巻佐々木茂子、中巻中村始子、下巻中村延子。朱筆の勘物少々。下巻末に「琴平神社本により透写せしむ／昭和十七年四月」。

三　伝本解説

①　龍谷大学図書館蔵本

本文の性格については考察済みなので、書誌事項を補記する。整理番号「913、39／3／2」。外題は表紙中央赤地題簽に「保元物語　上（下）」、巻首題は「保元物語上（下）」。二巻二冊。香色地花菱型押文様表紙。墨付紙数上巻八二丁、下巻六九丁。袋綴。一面九行。平仮名交じり。墨付第一丁表右下に「写字台／之蔵書」の朱楕円印。

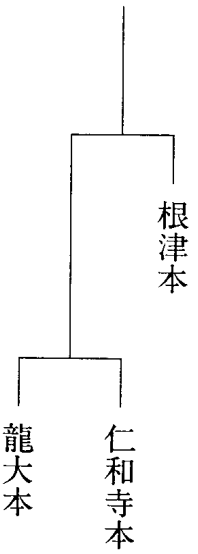
②　仁和寺蔵本

『平治物語』と併せて四巻四冊。外題は、表紙左に「保元平治物語」と打ち付け書、巻首題は「保元物語　上（下）」。小豆色地金泥菊紋散らし文様表紙。墨付紙数上巻七六丁、下巻五三丁。袋綴。本文料紙は楮斐混ぜ漉き。寸法二九・七×二二・四糎。一面一一行。平仮名交じり。同筆と思われる墨筆書入あり。前遊紙裏に、仁和寺蔵を示す朱印あり。

該本は、上巻頭より第五三丁表までは金刀本系統の本文、第五四丁表以降下巻末までは京図本系統の本文よりなる取り合わせ本である。金刀本系統の本文を伝える部分は、冒頭より東三条殿行幸記事までで、金刀本系統に属する大多数の伝本の上巻部に相当する。金刀本系統本文と京図本系統本文との境目である上巻第五三丁裏には皇室系図が掲げられ、取り合わせであることが判然としている。

まず、金刀本系統に属する前半部について述べると、それは、陽明本系列の京都大学国文研究室蔵本（京国本と略称）・広島大学国語学国文学研究室蔵米子市立米子図書館旧蔵本（広大本と略称）に近い。上記の皇室系図は、位置・記載内容ともに京国本に一致する（ただし、仁和寺本は漢字、京国本は平仮名と、表記は相違している）。仁和寺本には、いくほどかの欠脱[1]及びごく小さな誤りが比較的多く見いだされる一方、京国本[2]や広大本[3]のかなり規模の大きい欠脱を補う事実が認められ、本文的には京国本・広大本よりも優れているのではないかと判断される。

次いで、後半部の、京図本系統の本文を伝える部分について述べると、それは、龍谷大学図書館蔵本（龍大本と略称）に酷似している。龍大本に近似する伝本としては他に筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本（根津本と略称）があげられるが、仁和寺本はそれよりなお龍大本に近い。ただし、どちらか一方が他方の書写本であるといった直線でつながる書承関係にはなく、相互にその不備を補う関係にある[4]。仁和寺本には誤脱・誤記の類が比較的多く、小さいながら固有の意改も見いだされる[5]ので、本文の純良度ではいずれかといえば、龍大本の方がすぐれているか。結局のところ、京図本系統本文を伝える部分については、仁和寺本と周辺伝本の関係は大まかには下図のように捉えられるだろう。



もっとも、仁和寺本には、一部、学習院図書館蔵斑山文庫旧蔵本と共通の欠脱が見られる事実もあり[6]、本文錯綜の実態は想像を越えるものがあろうか。

（1）仁和寺本に見られる比較的大きな固有の欠脱としては、

①　しやうらくするよしをこたへてこゝをは（ぶしにやとをる）又しろく院かたへまいるよしをいひて（70）

②　はやふさの御やしろのまへ（をすきてせんたちのいつミのはたにたんをたて）をこなふそうあり（72）

といったものが目につく程度である。（　）内が仁和寺本には欠けており、京国本で補った。なお、参考のため、旧古典文学大系本における所載頁を文末の（　）内に示した。

（2）京国本に見られる比較的大きな固有の欠脱（あるいは省略）としては、

①　こくもによくハん（も又御すかたを見たてまつるへからす中にも女院）の御なけきたくひすくなかりし御事也（61）

②　たゝみちかくハんはく（しやうをおさめられて関

白）をさふにつけらるゝか（64）

③　ちかはるからうしう（十よきうたれにけりもともりからうとうも）やにはに八きうたれぬ（71）

④　かたきハわつかのこせい也（みかたハ大せいなりくひをとりてハむねんなり）いけとりもつともたいせつ也（71）

⑤　みかわの国、ハ（したらのひやうとうむしやとうたうミのくに、ハ）よこちかつまた（94）

といったものが目につく。（　）内が京国本には欠けており、仁和寺本で補った。文末（　）内の数字は旧古典文学大系本における所載頁。

（3）広大本固有の比較的顕著な欠脱（あるいは省略）は、仁和寺本前半相当部に五箇所存在するが、仁和寺本にはそれら欠脱は見られない。

（4）まず、龍大本の欠脱を仁和寺本で補正しえる顕著な事例を示すと、

①　四位せうなごん（なりたかまいりてかゝへたてまつりつるためよし三井寺のかたへ御しのひ）有へき由申しけれハ（51）

②　保元のいくさハふしきの（かつせん也）おぢおハおいにきらせ（72）

③　内記平太ひたゝれのひもをときおしくつろけて（天王殿のむくろをふところの中にかきいたき）さすかに御うちに人こそあまた有しかとも（84）

④　ためとも（此よしを聞て不思儀の事なりためとも）にこそしたかふべきに（105）

などがあげられる。右掲文において（　）内の記述が龍大本には欠けており、それを仁和寺本で補った。

次に、仁和寺本の欠脱を龍大本で補正し得る例を示すと、

①　くんこうのしやうにおゐてはしそんにをよふへしとおほせ（出されけれハ彼等庭上にひざまついておほせ）うけたまハりていてぬ（59）

②　かう〳〵と申たらハ（思召事あらは）おほせられんすらん（74）

③　はつかしからぬ僧のあるにかミを（そらせんと思ふなりそれまても心もとなけれバとてりきしやにかたなをこひてもとゆひきハよりかミを）きり（87）

④　ことふもの（とてハ松ふく風なぎさのちどりきしうつなミ）のこゑばかり也（97）

⑤　三度までゆるき（けるこそふしぎなれさてもことしもくれ）ぬれハ（100）

などがある。（　）内の記述が仁和寺本には欠けており、それを龍大本で補った。参考のため、和泉書院本における所載頁を文末の（　）内に示した。ただし、同系統の他本にも（　）内相当記述は存在しているので、両者の間にのみ相補関係が成立するということではない。

(5)　仁和寺本固有の記述には次のごときものがある。

①　あひちかいにうちよつて申けるハ八郎為朝ほとの者を
　傍線部、他本（41）「あひぢかに打よつたれば」。

②　下野守とのゝ陣のまへにまいりて
　他本（44）には傍線部記述がない。

③　世中いまハかうとそんし候つるそやとてもつてのほかにそおそれける
　傍線部、他本「かうにて候つるぞや」（44）。

④　しもつけのかミ源義朝となのつてむかふ
　傍線部、他本「なのるに」（44）。

⑤　下野守むまの三事かうかふとの着やうあつはれ大将軍やとそ見えたる
　傍線部、他本「馬の上のことがら」（45）。

⑥　さしもほうこうをはなはたしくして身をいたつらになしつる
　傍線部、他本「さしものほうこうをむなしうして」（54）。

⑦　ひかし山なる所に御るすゐをようゐして候へハ
　傍線部、他本「御すまゐ」（73）。

⑧　舟をもいそきよすへきやうもなし
　傍線部、他本「きつとよせえず」（103）。

他本については、便宜上、和泉書院本をもって代表させた。伝本間で小異が見られるものもあるが、その場合でも、仁和寺本と一致するものはない。これらを見ると、③は仁和寺本の意改が無難な例といえようが、①②⑥⑦⑧はむしろ改悪といえる。④はいずれでもよい。⑤は意味不通だが、恐らく、「馬の上」を「むまの三」、「ことから」を「事かう」と誤読したことに因るものだろう。

(6)　両本には「りよしうの白日に伴て（悲涕の愁をけすいかでか旧郷に帰て）再世きなさん」（99）とする文中、（　）内の記述が共にない。ただし、前後の語句は相違しているので、両本の符合が単なる偶然であることも考えられる。

③　原水蔵本

外題は表紙左原題簽に「保元物語」。内題は「保元物語巻第一」。縹色無地表紙。一巻一冊（上下二巻のうち、上巻のみ存）。墨付紙数六七丁。袋綴。本文料紙楮紙。寸法三〇・〇×二一・一糎。一面一〇行。平仮名交じり。同筆書き入れあり。本文第一丁右下に「花月堂蔵」の朱長印、「村井氏／蔵書」の朱方印。該本は蓬左文庫蔵平仮名交本の忠実な書写本と判断される。神宮文庫蔵本が蓬左本を配行に至るまで厳密に書写するには及ばぬが、書写姿勢は極めて丁寧で、誤りは極少。表記については蓬左本の平仮名を漢字に改めている箇所が多く、また、蓬左本の誤謬を是正している点も多い。

④　中京大学図書館蔵本

原本未見。斯道文庫収蔵フイルム（整理番号　A564C）による。該本については、大島龍彦氏による解題（『中京大学図書館蔵国書善本解題』）が既にあるが、いささか補説したい。上記解題中に「本書は、金刀比羅宮蔵本系統に属するが、中でも（略）陽明文庫蔵宝徳三年奥書本に近い。その宝徳三年本は、第五類の京師本に近似している。したがって本書もまた（略）京師本と（略）多くの共通点がある。」と記される通り、該本は、金刀本系統の宝徳本系列に属する本文を持ち、中でも、彰考館文庫蔵京師本（京師本と略称）との間に共通の字句や誤りが多く見られることより、京師本に最も近い位置にあると判断される。ただし、京師本は、金刀本系統本文の後に為朝説話を付載したもので、永積分類においては、京師本系統として独立している（京師本系統に属する伝本としてはこの他に静嘉堂文庫蔵本・尊経閣文庫蔵本・河野美術館蔵本が数えられるが、京師本が他三本の祖本にあたることが犬井氏により明らかにされている）。中京大本は巻末に為朝説話を持たない純然たる金刀本系統の伝本であり、この点で両本は相違する。このことを踏まえた上で両本の本文を比較するに、中京大本には、十音節を越える欠脱（或いは省略）が五箇所見られる[1]ほか、微細な欠脱や誤りが比較的目につく。さらに、小さいながら固有の改変も相当数見られることより、特に本文の純良度が高いとは言えない。また、京師本に比して平仮名表記が目立つ。が、一方においては京師本の誤脱を補う利点をも備えている。以上の事実より、両本の関係は次の如く捉えられるだろう。すなわち、京師本（ひいては京師本系統）は、現存本の中では、中京大本に最も近い金刀本系統の伝本をもととし、それに為朝説話を付載して形成されたものと推定される。なお、両者間に見られる異同の中には、系列の枠を越える本文交渉の実態を垣間見させるかと思われるものもある[2]が、余りに些細なこともあって、今のところ見通しめいた見解を述べることができない。

（1）その五箇所を左に示すと、

①　しかのミならす（推古てんわうの御宇に上宮たいしよにいでゝもり）やがじやけんをたいらけて（471）

②　つゝミをのほりに（北をさしてそむかいける）まちかくうちよせて（518）

③　はぐんしやうのものこそやふ（るなれのけ〳〵とのばら此もんおいやふ）らんとて（536）

④　くんて落るものもあり（落かさなるものもあり）とらの刻より（541）

⑤　よハらせ給ひ（てくつれおちさせ給ひ）けり（552）

である。本文引用は京師本、各々（　）内の記述が中京大本には欠けている。なお、文末（　）内の数字は汲古書院刊影印本の頁。

（2）そうした可能性が考えられる例をいくつか示す。

①　申もはてされは（494）

傍線部、中京大本「ぬに」。他本の多くは、京師本

に同じだが（金刀本系列は「さりければ」）、陽明本系列は中京大本に同じ。

② はちつけのいたにしたゝかにぞいつけたる（514）

中京大本には傍線部記述がない。他本の多くは、京師本に同じだが、陽明本系列は中京大本に同じ。なお、「いつけたる（り）」は中京大本では行間書き入れ。

③ 子ともあひつれてゆきけるか（599）

傍線部、中京大本「くして」。松井本系列及び京国本は中京大本に同じ、他本のほぼすべては京師本に同じ。他に「つらなりて（ぞ）」「伴て」とするものもある。

④ くやしかりける物まふてよとのたまひける（647）

傍線部、中京大本「かな」。他本の多くは、京師本に同じだが、松井本系列は中京大本に同じ。

本文引用は京師本で、文末（　）内の数字は汲古書院刊影印本の頁。

事例としては、このような類であり、その他も付属語の相違・有無といった程度の微細な現象であるため、本文交渉をあとづける積極的な根拠に成り得るかどうか躊躇われる。

⑤ 広島大学国語学国文学研究室蔵米子市立米子図書館旧蔵本

整理番号「国文／２３６４／Ｎ」。外題は表紙中央題簽に「保元物語　中」（中巻のみ残存。上・下巻は剝落）。藍鉄色地雷文繋ぎ文様表紙。三巻三冊。墨付紙数上巻六二丁、中巻八〇丁、下巻五四丁。袋綴。本文料紙は楮紙。寸法二六・三×二〇・七糎。一面一〇行。平仮名交じり。各冊表紙右肩に「国文／２３６４／Ｎ」のラベル貼付。また、各冊表紙見返しに「広島／大学図／書之印」の朱方印、広島大学及び国語国文学教室の所蔵を示す青印各一種、鉛筆書きの架蔵番号。墨付き第一丁表に「広島大学／図書之印」の朱印、及び「藤本文庫」の朱長印、「米子市立／米子図書／館蔵書印」の朱方印（押消印）。各巻末に整理番号の青印（押消印）。その他、本文紙中に「市立米子図書館蔵書」の朱円印（押消印）あり。朱・墨両様による書き入れ・訂正が見られるが、墨筆書き入れは本文と同筆か。

該本（広大本と略称）は金刀本系統の陽明本系列に属すると判断されるが、中で、京都大学国文研究室蔵本・大東急記念文庫蔵屋代弘賢書入本（屋代本と略称）により近い。広大本は上巻第七丁表に百音節を越える欠脱（目移りに起因すると思われる）を持つほか、比較的目につく固有の欠脱（あるいは省略）を十箇所程度有する。誤字・誤句もいくほどか見られ、錯簡も一箇所ある。[1] しかし、京国本・屋代本に比し、固有字句の数は遙かに少なく、しかも、他の二本におけるそ

れが多く意改であるのに対し、広大本の場合、誤解・誤写が原因で生じたと判断される類が多い。この事実は、書写に際して、広大本が、他二本に比し私意を加えること少なく、親本により忠実であったことをものがたる。そうした意味では、該系列の本来性を探る手がかりの一つを与える伝本といえる。なお、本文の形成を考える上で留意すべき現象が、忠実宛て師長書簡（下巻第二九丁表～第三〇丁裏）中に見いだされる。すなわち、広大本は、書簡文を「一日乍押別涙罷出御所之後」と漢文で記し始めるが、途中でやめ、「一日へつるいをおさへなから御所をまかり出るの後」と、改めて書き下し文で記し直している。そのため、書簡の冒頭部に内容上の重複を生じている。該書簡の表記については、諸本で、漢文・書き下し文の両様が存在しており、陽明本系列では、陽明本を除く諸本書き下し文である。このような状況の中で、広大本における上記現象をいかに捉えるべきか。一つの理解としては、親本が漢文であり、それを忠実に書写し始めたが、途中で書き下し文の方がよいと考え、冒頭より書き改めたとする考え方があろう。他には、書写に際して机辺には、二様の親本があり、筆写の途中で依拠伝本を取り替えたかとの推測も可能だろう。このいずれか、或いはなお別の事情によるものか、今、ここに断じることはできないが、本系列の伝播を考える上で興味ある現象ではある。

（1）下巻第四一丁裏第九行「うらやましくそ」より第四二丁裏第一〇行「都へのほり」までのほぼ一丁分の記述は、第四四丁裏第一〇行の「ともなふこゑ」に後続すべきもの。これは、広大本に至るある写本の段階で乱丁が生じたが気付かれずに書写され、幾度かの転写の過程での字詰め変更により、広大本に見られるような、面半ばでの錯簡現象となったものだろう。

⑥　国文学研究資料館蔵宝玲文庫旧蔵本

該本（資本と略称）は永積分類の正木本系統に属すると判断される。該系統の伝本としては、正木信一氏蔵本（正本と略称）・宮内庁書陵部蔵平仮名交本（書本と略称）が知られているが、資本を得て三本の存在が確認されることとなる。正本を見ていないので、これら三伝本の相互関係は分からないが、資本と書本については、本文面で両者その過誤を相補う関係にあり、いずれか一方が他方に比し卓越して純良な本文を有するということはない。

正木本系統については、巻末の為朝説話以外、陽明本系列の本文であることが犬井氏により明らかにされているが、新たに資本を参加させることによって、書本本文の相対性がより明瞭になるとともに原正木本ともいうべき祖本の実態究明に、より一層の便が得られようか。ただ、資本は、陽明本系列本文の末尾に京図本系統の為朝説話を付加しているという点で、形態上は正木本系統にまったく同じだが、果たして正木本系統として扱ってよいかとなると、幾分の疑念がある。ごく一部ながら、資本の本文には書本及び陽明本系列諸本と

異なり、他系列に一致する現象が認められるからである。[1]

なお、資本には、為朝の九国における濫行記事にかなりの規模の欠脱があり、これを貼り紙をもって補っている事実や、少なからぬ行間書き入れが見られる事実がある。これら書き入れには、本行本文と同筆・異筆の二様があるようだが、個々に就いてそのいずれかを判定することは私には甚だ困難である。従って、統一的な見解を指し示すことはできないが、傾向としては次のことが言える。まず、前掲、為朝の濫行に係わる欠脱については、既に、犬井氏の指摘にあるように、「目移り」が原因の欠脱であり、同じ現象が書本・陽明文庫蔵三巻本（陽本と略称）及び金刀本系列諸本に認められる。資本は、この欠脱を他系列本文をもって補充している。また、行間書き入れの「人天大会五十二類非生の草木（山野のけた物かうかのうろくつ）に至迄」、「必一方ハ勝ならひなれハ。た、（かねてせうふをしりかたし）果報浅深により」「是程の炎天極（あつきイ）勢の比にて候」などについても、書き入れに相当する記述は書本・陽本に存在しない。この事実も、資本が、他系列本文をもって校合・補入を行ったことを示すものである。が、他方では、「凡夫とかく（思惟するに）おほしめすに不寄」、「近江国伊庭庄。（ミの、国青柳ノ庄イ）をそ被下ける」のごとき事例が見いだされる。これらは右掲の事例とは逆の現象といえる。すなわち、前者については、書本・陽本の本文は本行本文とは異なり、校合とみなされる書き入れ「思惟するに」の方に一致している。後者の場合、資本の親本とした伝本には「ミの、国青柳ノ庄」がなく、資本は、他本によって当該句を校合の形で表示したものと判断される。が、相当句は書本・陽本にも見いだされる。この点において、資本の親本は書本・陽本とは異なっていたと考えられる。以上より、資本の親本は、現存本では書本・陽本に似るものの、それらともある程度懸隔を有するものであったろうことを推測させ、それは、前述の、本行本文の検討結果とも符合するといえる。ただ、書き入れの同筆・異筆の見極めも困難であり、かつ、正本未見のことではあり、詳細は今後に期したい。[2]

（1）特に顕著な事例を一つ示すと、

いまこそ落合處よと思けれハ殿ハ景親をハさせるとかもなけれとも不忠の者とて常ハ不審し給へともまことの時ハ景親こそかゝるせんとにも合奉れ他人ハ誰かたすけたてまつるへき明暮小目みせ給ひたる事ハいかにこり給ひぬやといひけれハ景能をめ〳〵と成てよしや殿日来ハともあれかくもあれ今より以後ハわ殿ニ過たる奉公の人やハあるへき何事成ともの給ハん事に随ハめといひけれハさらは余所へつれ参候へきとて又昇負て出にける　（資本）

此言葉をもちゐすして罷出なハ兄のうらみものこるへしと思ひけれハけにも御理なり他人ハたれか扶申へしさらハ余所へつれまいらせハ（ママ）へきとて又かきおふて出にけるか　（書本）

大庭景親が負傷した兄の景能を救出する記述の一部、資本と書本は右の如く異なる本文を持つ。他本を見る

と、陽明本系列諸本は書本に一致するが、その他は資本に同じである。こうした現象を、資本がより本来的な姿をとどめている証と見るか、資本の本文形成に他系列伝本の関与があった痕跡と見るか、それは全体との係わりから考える必要があろう。

(2)「玉英堂稀覯本書目」第一九八号（平2・九）に掲載の『保元物語』も、掲げられている巻頭・巻末二葉の写真から憶測するに、金刀本系統の後ろに京図本系統の為朝説話を追加したもののようで（為朝説話の始まりの部分に「是ヨリイ本」との傍書が見られる）、形態的には正木本と同じかと思われるが、確かなところは分からない。

⑦　実践女子大学図書館常磐松文庫蔵本

木箱入り、箱表に「保元物語　古写」と墨書。外題は、表紙左の黄土色地銀砂子散らし題簽に「保元物語　上（〜下）」（本文とは別筆）、巻首題は「保元物語上（〜下）」。焦香色地菱繋ぎ型押文様表紙。三巻三冊。墨付紙数上巻七〇丁、中巻九二丁、下巻六一丁。袋綴。本文料紙は楮紙。寸法二六・七×一九・五糎。一面九行。平仮名交じり。第一冊表紙見返し右肩に「44／教育研究／　　」の朱楕円印、各冊巻首題下に「実践女子大／学図書館印」の朱長印、同末に「常磐松文庫印／七一六九〇（〜七一六九二）」の朱長印（ただし数字は墨筆記入）。同筆及び別筆による墨書訂正あり。また、読みに関する別筆の付箋が二十二箇所見られる。上巻頭に白河から後鳥羽に至る皇室系図、中巻頭及び末に源氏系図を掲げる。

以下、本文の性格について述べる。該本（実本と略称）は、金刀本系統の松井本系列に属する伝本と判断される。該系列に所属する伝本には、静嘉堂文庫蔵松井簡治博士旧蔵本（松本）・静嘉堂文庫蔵玄圃斎旧蔵本（玄本）・天理図書館蔵袋綴本（天本）・九州大学国文研究室蔵本（現在は同大附属図書館保存書庫所蔵）（九本）・蓬左文庫蔵平仮名交本（上巻のみ）（蓬本）・神宮文庫蔵賢木園文庫旧蔵本（上巻のみ）（神本）・原水本の七本が知られるが、これら諸伝本と実本との親疎関係について述べると、実本には十五音節を越える欠脱（伝本間で字句の小異が見られることより、厳密な数値化は困難だが、便宜上、松本を、松本が欠く場合は玄本をもって数えた）が二十六箇所見られる[1]（ただし、系列全本に共通する欠脱は除外する）。この二十六項について、系列中の他本との異同を見ると（神本・原水本は蓬本の写しなので省略）、

実本のみに見られる欠脱－十、　蓬本と共通の欠脱－一、
九本と共通の欠脱－五、　蓬本・九本と共通の欠脱－三
蓬本・九本・松本と共通の欠脱－七

となる。右の結果より、実本は、大局的には、蓬本・九本・松本、中で特に九本に近い本文を持つと判断される。もっとも、この判断には難点がある。というのは、蓬本は金刀本系統と京図本系統の取り合わせ本のため、ほぼ上巻部分しか調査に利用できないからである。そこで改めて、蓬本が利用で

きる部分に限った場合、その数値は、

実本のみに見られる欠脱―二、　蓬本と共通の欠脱―一、

蓬本・九本と共通の欠脱―三

蓬本・九本・松本と共通の欠脱―七

と変わる。これを見ると、蓬本を比較・対照できる部分については、実本・九本のみに共通の欠脱は皆無となり、実本は九本よりはむしろ蓬本に近いのではないかと考えられる。恐らくのところ、実本は、蓬本を遡る伝本との係わりで捉えられるべきものとは思うが、取り合わせ本という蓬本の現状を考慮すれば、現時点では、九本に最も近似する伝本として捉えざるをえないだろう。両者を比較すると、実本には九本が上巻に有するほぼ一丁に及ぶ大規模な欠脱が見られない事実を始め、他にも純良な要素が認められる一方、先に示した十箇所の欠脱以外にも小さな誤字・脱字が相当数見られる。このことより、総体としては、実本は九本よりも本文的に幾分劣る位置にあるのではないかと判断される。

（1）これら欠脱は、上巻第四丁裏、五オ、一一オ、四一ウ、四四ウ、四五オ、五〇ウ、五四オ、五七ウ、六四オ、六六オ、六七オ、六七ウ、七〇ウ、中巻七ウ、一三オ、一五オ、二一ウ、五五オ、六五オ、七七オ、下巻一ウ、六ウ、二七オ、三六オ、四〇オ、に見られる。

⑧　早稲田大学図書館蔵津田葛根識語本

整理番号「リ5／12428／1～3」。同筆の『平治物語』（三巻三冊）と揃え。緑地桐唐草文様（織文）帙入り。帙題簽に「保元物語 平治物語」、また、背に「古写本六冊 古写本大々形本 古本」と別筆記載。外題は、表紙中央金泥草木文様題簽に「保元物語　上（～下）」、巻首題は「保元物語　上（～下）」。濃縹色表紙。三巻三冊。墨付紙数上巻六〇丁、中巻七五丁、下巻四七丁。袋綴。本文料紙は楮斐混漉。寸法三一・〇×二二・五糎。一面一〇行。平仮名交じり。各巻本文第一丁表右肩に「早稲田／大学／図書」の朱方印。本文と同筆の振り仮名のほかに、後人による墨筆振り仮名、微細な書き入れ、また、鉛筆による当て漢字、振り仮名あり。中巻第七丁表に貼紙一紙。上巻頭に皇室系図（一丁）中巻頭に源氏系図（二丁）同尾に源氏系図（一丁）を付載する。[1] 僚巻の平治物語下巻末に左の識語がある。

此保元平治物語六冊予在洛中購得焉／比校于水府参考本（京師本杉原本鎌倉本半井本岡崎本普通之印本凡六本―以上割書）大同小異於京師本也然水府彰考／館之儒未見之一奇書歟可貴可愛矣／文化十二年十月若狭藩士近江津田葛根識（花押）

該本（早大本と略称）は金刀本系統の松井本系列に酷似する本文を持つが、該系列に属する伝本と認定してよいかどうかは疑問である。犬井氏は、松井本系列の備える条件として、該系列諸本に共通する欠脱を十九箇所にわたって掲出しておられるが、[2] 早大本は、その中十二箇所一致し、七箇所異なっている。この事実は、早大本が、松井本系列に極めて近い位

置にありながらも、該系列に全面的に包括されるものではないことを語っている。換言すれば、早大本は、松井本系列に酷似するが、他面、該系列と異なる因子をも無視できないほどに有する伝本ということになろう。

右のごとき形態を有する早大本をいかに位置づけるべきか。蓋然性としては、二様が考えられよう。一つは、松井本系列に属する一本（それが現存するか否かは問題ではない）に主拠しながら、他系列の本文を適宜取り込んで成立したとする考え方であり、もう一つは、現行の系列分類では捉えきれない形成経緯を持つ伝本であるとする把握である。このいずれであるか、にわかには決し難いが、後者の可能性が高いように思う。以下、この点について述べたい。

まず、該本が、松井本系列に属する諸伝本と如何なる関係にあるかを検討する。犬井氏は、六伝本を松井本系列の名のもとにまとめられているが、実践女子大学図書館蔵本及び原水蔵本もこの系列に属すると判断されるので、現在のところ、八伝本の存在が確認される。これら八伝本は、同系列に属するとはいえ、各々固有の、もしくは、数本に共通する字句や欠脱を有している。いま、一つの試みとして、該系列に属するいずれか一本もしくは数本に共通して見られる欠脱（省略かと思われるものも含む。また、系列全本に共通する欠脱は対象外とする）の中から、比較的顕著なもの（曖昧な物言いだが、一行弱程度以上の分量を目安とした）を私意に抽出すると、五十九箇所確認できる。その内訳を示すと、

松本固有の欠脱　十　　九本固有の欠脱　二
実本固有の欠脱　十　　玄本固有の欠脱　五
天本固有の欠脱　九　　天本・玄本に共通の欠脱　六
実本・九本に共通の欠脱　六
実本・蓬本に共通の欠脱　一
実本・蓬本・九本に共通の欠脱　三
実本・蓬本・九本・松本に共通の欠脱　七

（神本・原水本は蓬本の写しなので省略した。また、蓬本は取り合わせ本のため、対象となるのは上巻相当部のみ）

右の数値より、各々の伝本に固有の欠脱（省略）、及び数本に共通する欠脱（省略）が相当数見られることが確認される。これら五十九箇所の欠脱を早大本に照合すると、該本に見られる欠脱はこの中六箇所にとどまる（内訳は、九本と共通の欠脱　一、実本・九本と共通　二、実本・蓬本・九本と共通　一、実本・蓬本・九本・松本と共通　一）。系列中の善本とされる松本においてさえ十七箇所認められることを考えれば、この事実は、早大本の本文が、かなり純良であることを示している。

次に、早大本の本文が、松井本系列から離れ、他系列に一致或いは類似する箇所を検討する。すべてを掲げる余裕はないので、顕著な事例のみを記す。

① そののちていわう（廿五代星霜ハ三百余回也〈略〉禁中を守り給ふ蘋蘩礼）をこたらすふんゆのかげさかりな

り（89）

右は、早大本の本文。参考のため、旧古典文学大系本における所載頁を文末の（　）内に示した。以下についても同様。松井本系列に（　）内相当記述、旧古典文学大系本にして約八行に及ぶ大きな欠脱があることは、既に犬井氏の指摘されるところ（ただし、蓬本及びその転写本では、行間書き入れの形で存在）。他系列は早大本と同様欠脱を生じていない。

②　わざとしきだい申候ぬ（また御よろいハ八りうとハ見へ候）二の矢におゐてハ（なに、ても候へ）申うけんする候（110）

これも、犬井氏の指摘される如く（　）内相当部が松井本系列にはない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本に近く、陽明本系列は少々異なる。

③　他人ハたれかたすけ奉るべき（あけくれこめ見せ給ひつる事はいかにこり給ひぬや）といひければ（112）

やはり、犬井氏の指摘される如く（　）内相当部が松井本系列にはない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本と同趣、陽明本系列はこのあたり大異。

④　物のぐにめをかけてぬす人やうちふせすらんと思ひ又兄がよろいもぢうだひなりわかきたるもさうでんのよろいなりいのちにかへておしく思ひければ（兄にぬげといはんも心えなくて兄も弟も）よろいきながら（113）

松井本系列は、傍線部「いかなる事かあらん」（松井本の本文による。以下についても同）と異なり、また、（　）内相当記述も存在しない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本と同趣。陽明本系列は大異。

⑤　たとひ卿相の位に昇といふ共誰かあへて過分の寵職と申べき凡朝敵をたいらくるものは（124）

松井本系列、傍線部、各々「かたふけはんへるへき」「ほろほす」。陽明本系列が早大本に同じ。

⑥　玄顕御まくらちかく参りて(A)玄顕こそ参りて候へ御らんじしらせたまへりやと申せば（略）やがて(B)事きれはてきへいらせ給ふ（略）つゐにはかなくうせたまふ（御いたハしさ申も中々をろかなり）（131）

松井本系列、傍線部、各々「玄顕こそまいりて候へ得業まいりて候へ」、「めつにいらせさせたまふ」（天理本は「たえいらせ給ふ」）と異なり、また、（　）内相当記述も存在しない。傍線部Ⓐについては、宝徳本系列の東大国語研究室本・学習院図書館蔵九条家旧蔵本が早大本に同じだが、傍線部Ⓑ及び（　）内は陽明本系列が同じ。

⑦　天のせめをやかうむりけん（135）

松井本系列、この下に「うんめいやつきたりけむ」との文がある。陽明本系列・金刀本系列が早大本に同じ。

⑧　世の中のならいかからず一じゅんならず（たかき所を行時もありひき、所を行時も有べし）（137）

松井本系列には（　）内相当記述がない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本に同じ、陽明本系列は大異。

⑨　あしくハ家人ともおもふべし（弓矢とるものはしたしきに過たるかたうどなしかれら四人おひたちたらばよきらうどう百人にはかへまじきなりよく〳〵義朝にいふべし）とて又なミだにむせび給ふ（146）

犬井氏の指摘される如く、松井本系列には（　）内相当記述がない。他系列は早大本に同じ。

⑩　まして人間に（命にすきておしきたから何かあるべきひとり身なるぼんくわ人のおもひをく事なきだにも＜略＞子共おほかりけり）為義日ごろねがひけるハ（146）

犬井氏の指摘される如く、松井本系列には「ましてにんけんにをひてをや」とあり、（　）内相当記述がない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本に近く、陽明本系列は小異。

⑪　こうくわいもしたまハんずる物を（いちこのうちもおぼつかなし子孫はんぢやう不実なりたゞしかういふてもいまはむやくなり命をおしむにたり）（148）

松井本系列には（　）内相当記述がない。宝徳本系列・金刀本系列が早大本に近い。

⑫　よくいひけりと思ひあハせ給ハんずるぞ（とをくハ七ねんちかくハ三年の中をはすぎじ）たしかに申べし（156）

松井本系列には（　）内相当記述がない。他系列は早大本に同じ（但し、内閣文庫蔵本一部異なる）。

⑬　いまハ又ひきかへてともへきりたる小舟のめしすへやかた舟にうつもれさせたまひつゝ南海へう〳〵たる旅泊に（164）

松井本系列は傍線部「ひきかへたる御ありさま」とある。他系列は早大本に同じ。

⑭　（しんいんほうぎよの事みやこへきこえしかば）入道ほつしんわうより（181）

松井本系列には（　）内相当記述がない。他系列は早大本に同じ（但し、東大国語研本はこの辺り長脱）。

以上、早大本の本文が、松井本系列から離れ他系列に一致或いは類似する顕著な事例からその半数ほどを示した。なお、各伝本間には微細な字句の相違が認められるが、煩瑣を避けてこれを無視した。

右掲の各項を通覧するに、早大本は、松井本系列と離れる箇所において、他の三系列のいずれか特定の系列と特に緊密な関係は見られず、一貫した親疎関係が窺えない。この事実並びに先に述べた、早大本が、松井本系列に属する諸本に比して本文の純良度が高いという事実は、早大本が、松井本系列の後流に位置するものではない、すなわち、松井本系列に属する一本に主拠しながら、他系列の本文を適宜取り込んで成立したものではないことを物語ってはいないか。

固有の誤字や欠脱がそれなりに見られるものの、早大本は、全体的に誤脱・意改の少ない本文を伝えている。欠脱としては、「新（院のたうしの御所ハとはのたなか殿なりこ）院此御所にてほうぎよなりしうへ」（上20ウ）（旧大系本67頁）、「今度の大しやうにをきてハなんちに給ハる（ちうこうをぬきん

てハ日来のしよまうのせう）てんを不日にゆるさるへきなり」（上52オ）（91）、「あふ（ミの国にハ佐々木のけんさうやしまのくわんしや）ミの（ゝ）くに、はよしの、太郎」（上57オ）（94）〔各々（　）内本文が早大本では欠けており、松井本本文をもって補った〕などが比較的目につく程度で、他は小語句に過ぎない。また、「上宮太子」を「聖徳たいし」（上48ウ）（88）と改めるなど、微細な固有語句も見られるが、とりたてて論じるほどのものではない。

以上のことより、松井本系列分岐以前の形姿を伝えるものとして早大本を捉えることが可能ではないかと思うが、詳細は後考に期したい。ここでは、早大本が通行の四系列分類では把握しきれない伝本であることを確認しておきたい。

（1）系図の位置は、九本・実本と一致している。記載内容も微細な異同があるが、ほぼ同一とみなしてよい。

（2）「金刀比羅本系『保元物語』の三系列―原金刀本追求のノート―」（『軍記と語り物』5　昭42・十二）の五七～五九頁、及び「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」（『和歌と中世文学』　昭52）の三二五～三二六頁。

⑨　東京国立博物館蔵平仮名交本

本文の性格については考察済みなので、書誌事項を補記する。整理番号「和2284」。外題は表紙左題簽に「保元物語　上（～下）」、巻首題は「保元物語　上（～下）」。香色無地表紙。三巻三冊。墨付紙数上巻四八丁、中巻六四丁、下巻四七丁。袋綴。本文料紙は楮斐混漉。寸法三一・八×二三・〇糎。一面一〇行。平仮名交じり。第一丁表右上に「大学蔵書」、中央右寄りに「帝国／博物館／図書」の朱方印、巻末に「昌平坂／学問所」の長方墨印及び「文政壬午」の朱印あり。墨・朱による振り仮名及び訂正が見られる。墨筆の振り仮名は本文とは別筆のようだが、訂正には同筆、別筆の二様があるか。

⑩　福島県三春町歴史民俗資料館蔵本

同筆の『平治物語』（三巻三冊）と揃え。上巻表紙中央に題簽一部残存、剝落跡に「保元　上」と墨書、下巻は剝落跡に「保元物語巻第下」と鉛筆書き。巻首題は「保元物語巻第上（下）」。薄香色無地表紙。三巻三冊。墨付紙数上巻五一丁、下巻五八丁。紙釘装。寸法二九・七×二一・九糎。一面九行。片仮名交じり。墨筆振り仮名は一部本文と同筆のものもあるようだが、多くは後付か。また、朱筆振り仮名及び行間書き入れが僅かに見られる。朱引及び句読を示す朱小圏あり。上巻表紙右肩に「三春文庫／1／第10号」のラベル貼付、各巻最終丁に「参春／文庫」の朱方印、裏見返しに「明徳堂官本」と朱書。上巻頭に鳥羽に始まる皇室系図、下巻頭に道長に始まる摂家系図、信西の系譜（いずれも保元・平治の頃まで）を載せる。

該本（三春本と略称）は、全体として、流布本系統に属するが、古態を探る上で重要な意味を持つ蓬左文庫蔵片仮名交

本・東京国立博物館蔵片仮名交本、特に蓬左本に近い本文を持つと判断される。というのも、蓬左本には一～二行程度の欠脱（或いは省略）が五箇所見られるが、その中の三[1]箇所が三春本と共通している。東博本にも同規模の欠脱が五箇所存在するが、三春本に一致するものはない。このことより、三春本が東博本よりは蓬左本に近い位置にあることが知られる。実際、三春・蓬左・東博三本を対校すると、三春本が、東博本よりも蓬左本に一致する事例が数多く見られ、共[2]通の誤りも相当数あって、両本の緊密な関係が窺われる。なお、三春本には一～二行程度の欠脱が四箇所存在する（その中の三箇所は前述の如く蓬左本と共通[3]）のを始めとし、小さな誤脱も少なからず認められ、蓬左本とは相補う関係にある。この事実は両本を直接の書承関係で捉えることを拒むが、強い緊密性が認められることから、両本は兄弟もしくはそれに準じる関係にあると推測される。一応の系統図を思い描けば、三春・蓬左両本の祖本と東博本（の祖本）の分岐の後に、三春本（の祖本）と蓬左本（の祖本）の分岐が生じたと見るべきか。ただし、三春本はごく一部に金刀本系統陽明本系列に近似する本文を取り込んでいる。西[4]行献詠譚の後半部及び義[5]朝勢列記の一部、ほか二[6]箇所に、その事実が明瞭に看取される。西行献詠譚については、崇徳院霊と西行の和歌贈答の形を取る金刀本の劇的な構想にひかれて、それを採用したものかと推測されるが、他の場合については、金刀本系統の本文を採択した意図は定かでない。採り込みが極めて部分的でかつ僅少であるのも奇妙である。

結局、三春本は、流布本系統に属し、かつ、原流布本を推考する上で重要な位置を占める蓬左本に近い本文を伝えていることより、注目すべき伝本の一つに数えられる。が、ごく一部に金刀本系統本文を採り込んでいる事実も認められ、後出要素も孕んでいるので、取り扱いに慎重さが求められる。

（1）三箇所の欠脱とは、

① 十五年ノ十月マテ大事ノ（軍をする事廿餘度、城をおとす事數十ケ処也。城をせむる）謀ト敵ヲ討ツ手立（356）

② 主ヲ肩ニ引懸テ御方ノ陣エソ皈リケル（寄手の兵是を見て、弥、此門へむかふ者こそなかりけれ。）去程ニ夜モヤウ〳〵明行ニ（363）

③ 是ヲ誅セハ忠トヤセン（信とやせん、若忠なりといはゞ、「忠臣をば孝子の門にもとむ。」といへり。若又信といはゞ、）信ヲハ義ニ近クセヨト云リ（380）

である。各々（　）内相当記述が三春本・蓬左本ともに欠けており、それを旧大系本附録古活字本で補った。参考のため、文末（　）に旧大系本における所載頁を示した。

（2）三春・蓬左本のみに共通する誤りを数例示す。

① 殿下ノ御気力ヲ承テ（旧大系本359頁）

② 下野ハ大炊御門源原ノ（蓬左本は「ノ」を「ニ」とする）前ニ（360）

③　西坂本（蓬左本は「本」を「東」とする）下リ松崎ニヲリシカハ（376）

④　左大臣豊成武智丸（387）（ただし、割書は三春・蓬左・東博本のみに存在）

とある傍線部本文は、他の流布本のように各々「色」「下野守」「河」「松」「武智丸子」とあるべきところ。

（3）残りの一つを示すと、

四郎左衛門頼賢ト八郎為朝ト（先陣をあらそひて、すでに珍事に及ばんとす。頼賢思ひけるは、「今子共の中には、我こそ兄なれば、今日の）先陣ヲハ誰カハ懸ント云（361）

の（　）内が三春本に欠けている。

（4）三春本に

角ク讀侍ケル　ミカヽレシ玉ノ臺ヲ露深キ（略）

ト申テ涙ヲ流シケレハ御墓所ノ近隣ニ御声トシテ松山ノ波ニ流テコシ舩ノ（略）西行夢トモナク現トモナク御返歌申ケリ　ヨシヤ君昔ノ玉ノ床トテモ（略）カヤウニ申タリケレハ御墓所三度迄振動スルソ怖シキ世澆季ニ及フト云ヘ共万乗ノ餘薫猶残ラセ玉イケルニヤト思遣コソ恭ナケレ

とある相当部、流布本一般は「かうぞよみ侍ける。よしや君むかしの玉の床とてもかゝらむ後はなにゝかはせん」（395）と簡略である。

（5）「藁科ノ十郎奥津ノ四郎」がこれに該当する。流布本一般は各々「高階十郎」「息津四郎」（359）。

（6）その二箇所とは鎌田正清の追撃を断念した為朝の言「サノミハカ〳〵シキ軍ハシ給ハシ」（流布本一般は「さのみ心にくからず」＜364＞）、及び崇徳院遷幸の一節「サラハ安楽寿院ノ方へ御幸ヲヒキ向ケサセテ何トカ申サセ給ケン」（流布本一般は「さらば安樂壽院の方へ御車を向て、かけはづすべし。」と仰ければ、則牛をはづし、西の方へをしむけ奉れば」＜388＞）の部分である。なお、後者について、三春本は、崇徳院の言がいつのまにか地の文になっており、本文として良くない。

⑪　正宗文庫蔵本

同装・同筆の『平治物語』（三巻三冊）と揃え。外題は、表紙中央題簽に「保元物語　第一（〜三）」。第一冊の題簽（破損大）は、薄茶色無地、第二、三冊は薄朱地金泥草木文様で、第一冊とは別筆で後補と思われる。巻首題は「保元物語巻第一（〜三）」。紺地に金泥の山水・草木文様表紙。窠文雷文繋ぎ型押金紙見返し。墨付紙数上巻六一葉、中巻八〇葉、下巻六八葉。列帖装。寸法二四・二×一八・〇糎。字高二二・〇糎。一面九行。平仮名交じり。各冊見返し右肩に、正宗文庫のラベル貼付、墨付第一葉右下に「正宗文庫」の朱長印、中・下冊末に「敦夫／珍蔵」の朱方印。目録・章段区分あり。上冊に乱丁が見られる（後ろ十三葉分は第四十葉と第四十一葉の間に入るべきもの）が、これは、後の綴じ直しの際生じた

ものだろう。

詳しい調査は行っていないが、瞥見の印象で言えば、本文は寛永元年片仮名整版本に似るか。ただし、寛永元年本が片仮名交じり表記であるのに対し、正宗本は仮名の目立つ平仮名交じり表記である。これは、寛永元年本の付訓の方に多く拠ったためではないか。また、該本は、寛永元年本を直接書写したものではなく、寛永元年本を源流とする転写本だろう。両者の異同の中には、正宗本が寛永元年本の本文を是正したと判断されるものもある。近衛院の誕生年を「ほうゑん五年」とする点（寛永元年本は「保元五年」）、「今旧院登霞の後は」と記す点（寛永元年本は傍線部「十日」）などがその例である。また、行間には「のこる三人のめのと同しうはらをきりにけるイ本」（下一〇オ）のように、本行本文と同筆とみなされる校合がいくつか見られる。校合に用いられた伝本は明らかではないが、他系統かもしくは古態を伝える流布本かのいずれかだろう。なにぶん、忽卒の間の調査なので、確かなところは分からない。

⑫　群馬大学附属図書館蔵『保元物語抜抄』

未見。資料館フィルム（77－20－6）による。整理番号「N913　44－H81」。一冊。外題は、表紙左、後補かと思われる題簽に、「保元物語為朝之條下抄録」。墨付紙数一三丁。一面一〇行。片仮名交じり。奥に「保元物語抜抄畢／是時文政三年歳庚辰仲夏念五寅／岩松三郎拾三齢謄録／右保元記之内字形往々有逕庭者叢臺換其労以写矣見者恐焉／叢臺道純誌」とある。内容は『保元物語』中のいわゆる為朝説話であり、寛永元年刊片仮名整版本の「為朝生捕被處流罪事」「為朝鬼嶋渡事并最後事」の二章段のみを書写したものと認められる。

⑬　松平文庫蔵『保元物語抜書』

『抜書』の拠った底本の同定を試みたい。原本は未見、笠栄治氏の翻刻による。結論を先にすれば、『抜書』の内容は京図本系統とほぼ一致することより、該系統に属する伝本に拠ったものではないかと推測される。以下、京図本系統中のいずれの伝本に近いかを検討する。該系統に属する諸本間で記述に異同のある箇所を『抜書』に照合してみよう。

①　神武天皇の寿命を、『抜書』は「一百廿余」とする。京図本系統中、根津本・龍大本は『抜書』に同じだが、他は「一百廿七」。

②　『抜書』は、駒引の馬を「院使」が請け取るとする。根津本は『抜書』に同じだが、他は「官使」「くわんし」とする。

③　宇野七郎を捕縛した人物を『抜書』は「宗盛」とする。根津本・龍大本・京大国史本は『抜書』に同じだが、他は「基盛」「もとより」とする。

④　朝廷軍の総勢を『抜書』は「二千三百余騎」とする。根津本・龍大本・京大国史本は『抜書』に同じだが、他

は記載しない。他系統では鎌倉本が『抜書』に同じ。

⑤　三条殿を、『抜書』は為義の妻の「乳母子」とする。根津本・龍大本は『抜書』に同じだが、他は「乳母」。

⑥　為義の妻の享年を『抜書』は「三十七」とする。根津本が「廿七」とする他は『抜書』に同じ。

⑦　源氏重代の鎧の掲出順が、『抜書』は根津本・龍大本・京大国史本に同じ。

掲出した項目のすべてにおいて『抜書』と一致する伝本は現存本には見あたらないが、傾向としては、根津本・龍大本が近い。このことより、『抜書』は、根津本・龍大本に近い伝本に拠ったであろうと推測される。ただし、『抜書』の記述内容がすべて京図本系統に一致しているわけではない。中に、いくほどか相違する点も認められる。それらを以下に示すと、

①　宇野七郎の父を『抜書』は「頼弘」とするが、京図本系統諸本は「親弘」「ちかひろ」とする。『尊卑分脈』の「親弘」の項には、「改頼弘」と見え、これを信じるなら、「親弘」「頼弘」いずれも妥当。他系統の多くは「親弘」とするが、半井本系統の一部は「治弘」、金刀本系統の学習院図書館蔵九条家旧蔵本・九大国文研蔵本など相当数の伝本は「頼弘」（「頼広」「よりひろ」）とする。

②　弓削道鏡について『抜書』は「河内弓削人也」との説明を付す。京図本を始め諸系統相当記述を持たない。

③　『抜書』に「山田三郎惟行」とある人物、京図本を始め諸系統、傍線部「小三郎」とする（金刀本系統の一部は「小次（二）郎」「小太郎」）。

④　合戦当時の為朝の年齢を『抜書』は「十六」とするが、京図本を始め、諸系統一致するものはない。

⑤　為朝の射た矢の総数を『抜書』は「七十三」（内アダ矢一）とする。京図本は七十五（内あだ矢二）、金刀本は百十一（内あだ矢二）（百五十、六十六、四十八とするものもある）、半井本は四十九（内あだ矢二）、流布本不明記、鎌倉本欠巻、と諸系統異同があるが、『抜書』と一致するものはない。

⑥　『抜書』は、西行の献歌に崇徳院霊が返歌したとする。しかし、京図本・金刀本は、院霊の歌に西行が返歌したとし、順序が逆。他系統は、西行の献歌を記すのみである。

⑦　為朝の捕縛に向かった人数を『抜書』は「卅余人」とする。京図本「廿余人」、半井本「三十人バカリ」、流布本「卅余」、鎌倉本「六七十人か程」、金刀本「三百余人」と区々であり、半井本・流布本が『抜書』に一致。

といった事実が指摘できる。これらを眺めるに、①の現象については幾分の議論を呼びそうだが、その他は微妙である。②は簡単な知見の付加であるが、その他については、『抜書』の誤認・誤写或いは大ざっぱな把握の結果と見ることもできるのではないか（事実、『抜書』は、伊豆における為朝の子を「三人」としながら、後文では、一人死んで「残三人」とする杜撰さを見せる）。すなわち、京図本系統と『抜書』間の齟齬

を、京図本以外の系統が『抜書』の形成に関与したことを示す証として必ずしも捉えなくてよいのではないか。笠氏は、翻刻に付した解説の中で、『抜書』に「完全に一致する異本」が見当たらない事実をもって、『抜書』を「一、幾つかの諸本から注目すべき事項だけを抽書きした。二、現在確かめ得ないが特異な一本の抽書」のいずれかであろうと考えられている。上述の「頼弘」「親弘」の問題もあるので、複数の伝本を用いた可能性を否定しさることはできないが、『抜書』記事のほとんどが京図本系統に一致していること、及び『抜書』の記述順序が京図本系統の構成と一致していることよりみて、京図本系統で、根津本・龍大本に近い姿の伝本に主拠したと考えて大過ないと判断する。

⑭　東海大学附属図書館桃園文庫蔵『保元物語』一本

整理番号「桃一五　五」、外題は、表紙左題簽に「保元物語首尾大島氏蔵本」。薄茶色無地厚紙表紙。一冊。墨付紙数七丁。袋綴。寸法二六・八×二五・八糎。一面一一行。平仮名交じり。池田亀鑑が、大島雅太郎蔵本の上下各巻の首を一丁分、尾を半丁分写し取ったもの。『桃園文庫目録』に簡単な解説がある。なお、該本の親本である大島雅太郎蔵本は、中京大学図書館現蔵本と思われる。

⑮　東海大学附属図書館桃園文庫蔵『保元物語』二本

整理番号「桃一五　六」、外題は表紙左題簽に「保元物語首尾大島氏蔵本」。薄茶色無地厚紙表紙。一冊。墨付紙数四丁。袋綴。寸法二六・五×一九・二糎。一面一〇行。平仮名交じり。末尾に「このほんゐづかたへ／参り候共早速御かへし被下候／沢而御頼申上候／天　もり嶋氏」と見える。前書と同様、池田亀鑑が大島雅太郎蔵本の下巻の首尾各一丁分を写し取ったもの。『桃園文庫目録』に簡単な解説がある。池田の識語によれば親本は下巻のみの零本の由。僅かに伝えられた本文からそれが京図本系統の本文であったろうことが推測されるが、現蔵者を知らない。

小稿の作成に際しては、多くの図書館・文庫の方々の御厚意に与った。また、伝本所在の情報入手・閲覧等に関しては長期に亙り入江昌明・長坂成行氏より多大の助力を得た。記して厚く御礼申し上げる。